車部品、独立系に軍配

株価上昇率「ケイレツ」は不振

車以外への投資で明暗

自動車部品メーカーのなかで市場評価の明暗が鮮明になっている。年初来の株価上昇率をみると上位10社のうち8社は特定の自動車メーカーの影響が小さい独立系だった。半導体関連など自動車以外の成長投資を強化したことで投資家の評価が高まった。

車向け部品や材料を手掛ける100社の2025年末から26年9月末までの騰落率を調べた。車メーカーとのつながりの深い「ケイレツ」企業と、ケイレツでない独立系とはほぼ半数ずつだ。東海東京インテリジェンス・ラボの杉浦誠司シニアアナリストの協力を得て車メーカーとの資本関係や売上高の依存度で判定した。

株価上昇率で2位に入ったのが自動車用ばねメーカーのサンコール。株価は2・5倍になった。主因はデータセンターで使う光ファイバーケーブルの先端に付ける、光通信コネクターの販売好調だ。主力の自動車向けバネ製品の苦戦を補う。

27年3月期の連結純利益は期初時点で前期比減少を見込んでいたが、今年8月には一転して増益になりそうだと発表した。

株価上昇率上位には独立系が多い

順位	社名	上昇率(%)
1	河西工	315.15
2	サンコール	149.13
3	原田工業	106.49
4	ヨコオ	94.73
5	ティラド	81.85
6	ＮＧＫ	62.37
7	ニッタ	58.96
8	大同特鋼	56.42
9	J-MAX	52.05
10	住友電	46.59

(注) 期間は25年12月末から26年9月末。網掛けが独立系。企業の分類で東海東京インテリジェンス・ラボの杉浦氏の協力を得た

4位のヨコオは26年3月期に半導体検査装置を含む「ＣＴＣ事業」の営業利益が前の期から倍増した。6月には検査装置の増産投資を発表した。車載アンテナなどが振るわないなかでも株価は9割高と堅調だ。

6位のＮＧＫ（旧日本ガイシ）は主力である自動車の排ガス浄化製品より半導体製造装置向け製品が注目されている。同製品を手掛けるデジタルソサエティ事業の4～6月期の営業利益は82億円と前年同期比で5割増えた。

5月には半導体製造の基幹部品や高速通信向け製品の開発に向け、2030年度までに2500億円を投じる計画を発表した。

独立系はケイレツ企業と異なり、特定の車メーカーから安定した受注が見込めるわけではない。ＳＢＩ証券の岩井徹シニアアナリストは「独立系はこれまで自動車以外の分野に積極投資しており、近年その成果が出てきた」と説明する。

上昇率で首位となった河西工業は日産自動車の系列だ。株価急騰の背景には業界再編への思惑がある。同業のイクヨが河西工業株の取得を進める方針を示している。

多くのケイレツ企業は株価が振るわない。トヨタ自動車系のファインシンターは4割安だった。アイシン（2割安）やデンソー（1割安）なども軟調だ。車メーカーが中国で販売数を落とすなか、依存度が高いケイレツ企業の評価が落ち込んでいる。

ケイレツ企業は足元の業績もさえない。4～6月期の連結純利益はアイシンが19%減、デンソーが14%減だった。アイシンは自動車向け駆動ユニットの販売台数が減った。デンソーは銅やアルミなど原材料の高騰が響いた。

自動車はソフトウエアの更新で機能を高める「ソフト定義車両（ＳＤＶ）」が競争力を左右する時代に入った。車メーカーがこれまでのようにケイレツ企業を守り切ることは難しくなっている。

時価総額ランキングを10年前と足元で比べても独立系の躍進が分かる。日本特殊陶業は26年9月末時点の時価総額が約1兆4800億円と6位に入った。10年前の約4倍だ。半導体製造装置向け製品「静電チャック」などの業績貢献が評価された。

9位にランクインしたニッパツは時価総額が3倍超の7823億円になった。データセンター需要増に伴いＨＤＤ（ハードディスクドライブ）用でサスペンションの販売が伸びた。

ケイレツ系ではデンソーの時価総額は7割増、アイシンやジェイテクトは微増にとどまる。ケイレツ系は車メーカーへの供給責任を果たすことを優先し、他分野への経営資源の振り向けが少なかった。

自動車メーカーは政策保有株式の縮減を進め、ケイレツ企業に自立を促している。ケイレツ企業は自動車産業の縮小を見据えた大胆な成長投資が必要になる。

(C)日本経済新聞社　無断複製転載を禁止します。

許諾番号NK005044　日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。